

ふるさと御所 文化財探訪

生涯学習課 文化財係
☎内線696

古墳時代〈11〉

鴨都波1号墳 (7)

墳丘規模と副葬品
内容のギャップ

二人の文献史学者からの葛城の範囲の考察は共に説得力はありますが、また共に地名からの考証につきものの弱点もあります。まず、小葛城説の式内社の名称の場合には延喜式えんぎしきの成立した10世紀初頭段階のカヅラキと呼ばれた地域を論じたに過ぎない可能性を否定できず、一方、大葛城説の根拠になった地名もせいぜい中世までしか遡さかのぼって確認できないうらみがあります。つまり葛城氏の勢力が最も盛んだった4〜5世紀の葛城の範囲はいずれの場合も検証しきれないのです。

このようなとき、強みを発揮するのが考古学といえます。私は古墳に副葬された鏡の副葬位置の検討から、大葛城説に立っていますので、ごく簡単にその根拠を記しておきます。

三角縁神獣鏡をはじめとする古墳時代の鏡の副葬配置には、複数の鏡を有する場合、棺内・棺外を問わずに大きくみると、頭の周囲のみに多くの鏡を配置する「頭部集中型」の鏡副葬配置と、頭の周囲と足の付近に分け置く「頭足分離型」の鏡副葬配置の区別があります。うち頭部集中型は弥生時代以来の伝統的な鏡副葬配置で、天理市黒塚古墳の事例（写真1）が示すとおり、大王家やそれに近い勢力が採用してきたものです。一方、頭足分離型は古墳時代前期中葉以降に登場する鏡副葬配置で、鴨都波1号墳の事例（写真2）などを典型例とし、葛城や淀川北岸地域を中心に展開したものです。

そして鏡副葬配置にかかるこの2種類の因習は、列島各地の首長に鏡が配布されるに際して、個別に伝達されたとみられます。頭足分離型の鏡副葬配置という、大王家とは異なる因習を保ち、それを全国に多くの鏡と共に伝達できる勢力としては、北葛城にある馬見古墳群を除いては考えられません。これが私が大葛城説を採る理由であり、前期の馬見古墳群の被葬者像については原葛城氏とでも呼ぶべきものと考えています。鴨都波1号墳からは小規模な墳丘に見合わない、三角縁神獣鏡4面をはじめめとする豊富な副葬品が出土し

ました。他勢力も見守る中、大王家との直接の関係の中ではこれほどの厚遇は得難いと考えられます。

頭足分離型の鏡副葬配置の因習と共に、三角縁神獣鏡をはじめとする銅鏡を全国に配布した前期の馬見古墳群の勢力にとつて、鴨都波1号墳の被葬者は片腕とも言える南葛城の伝統勢力でした。豊富な副葬品の大半は、馬見古墳群の勢力を通じてもたらされたものと考えれば、墳丘規模と副葬品内容のギャップも納得できるのではないでしようか。

参考文献…拙稿「葛城氏と馬見古墳群」『日本古代史 王権の最前線』（別冊歴史読本）第22巻第6号、1997年

（文責…藤田 和尊）

写真1

頭部集中型の鏡副葬配置（天理市黒塚古墳）
（奈良県立橿原考古学研究所転載許可済）



写真2

頭足分離型の鏡副葬配置（御所市鴨都波1号墳）



編集後記

ある深夜、トイレに行こうと寝ぼけ眼のままふらふらと起き出し、真っ暗な廊下の照明のスイッチを入れたら、すぐ目の前の壁面に巨大な褐色のクモが張り付いており、跳び上がるほどびっくりした。四肢を広げると10cm以上はあろうかという巨大なこのクモ、アシダカグモという種で、不気味な外観とは裏腹に憎きゴキブリを食べてくれる尊敬すべき有益生物だそう。大切に保護すれば家中のゴキブリを全滅させてくれるとはいっても、虫・クモ・ムカデが嫌いな私が、果たしてこのクモと仲良く共存していけるだろうか。到底耐えられそうにない。(久)



2010. 7